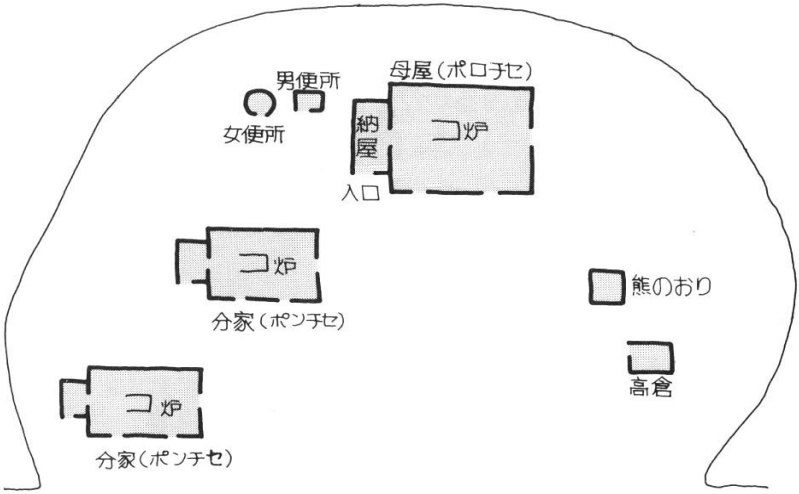
北海道 アイヌの家

北海道の先住民族であるアイヌが、１９世紀末ごろまで暮らしていたコタン（村）を、アイヌの人びとの協力で再現しています。敷地の奥にあるのが両親、手前の２棟が分家した子どもたちの家です。アイヌの人びとは炉を神様の寝床と考えたため、家は炉を中心に造られています。



【建築材の特徴】

屋根や壁に使われているのはイネ科の植物（アイヌ名：ラペンペ）で、１本１本がストローのような中空構造になっています。これらを束ねると厚い空気の層ができ、断熱材と同じ役割をはたします。アイヌは古くからこの資材の特性を活かし、自然の断熱材で家をまるごと覆うことで、寒い時期でも比較的あたたかく暮らすことができたのです。

環太平洋交易

アイヌ民族は、東北地方の北部から北海道、樺太南部、千島列島にかけて古くから暮らしてきた先住民族です。かつてはアイヌモシリ（アイヌ民族の大地）の豊かな自然環境を基盤として、採集・狩猟・漁労を中心とした生活を営む一方、本州や大陸の諸民族とも活発な交易をしていました。アイヌによる交易は、大陸と日本をつなぐ架け橋の役目を果たしていたと言われます。

アイヌは製鉄の技術を持っていませんでした。そのため、南方では和人との交易で、生活必需品である鉄の小刀や鍋を手に入れました。米や酒、タバコなども好まれました。その代わりアイヌは和人に、テン、キツネ、アザラシなどの毛皮や、清（現在の中国）からもたらされた織物などを渡しました。これを和人は蝦夷錦と呼び珍重しました。北方では、山丹人と呼ばれた大陸のツングース系の人びとと交易し、アイヌは交易品として毛皮のほか、和人より入手した鉄製品の一部を渡していました。山丹人からの交易品には、矢羽に用いるワシの羽根や、薬とするセイウチの牙などがありました。蝦夷錦も山丹人との交易で得たものでした。

こうした交易は「環太平洋交易」と呼ばれています。江戸時代、徳川幕府が鎖国を始めてからもこの交易は引き続きおこなわれ、中国の織物は長崎からばかりでなく、アイヌを経由しても入ってきました。そのため、この「環太平洋交易」を、「北のシルクロード」と呼ぶ研究者もいます。